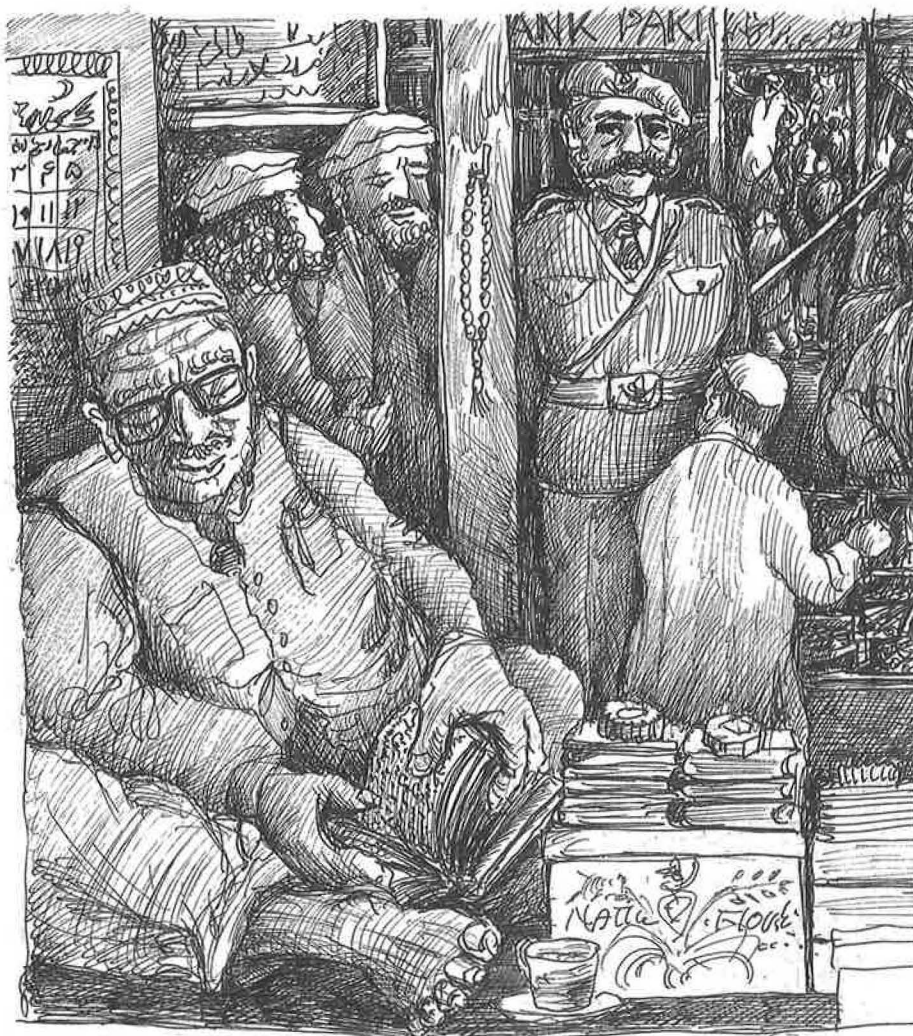


ペシャワール会報

No.43

ペシャワール会 〒810 福岡市中央区大名
一丁目一〇二五 上村第二ビル三〇七号
電話・FAX 〇九二(七三二)二三七二



- 久々にすがすがしい気分です…………… 中村哲
- みんなの秘められていた力が PLS で全開…………… 藤田千代子
- PLS の靴ワークショップも再開…………… 倉松由子
- ペシャワール会関東連絡会を結成…………… 佐藤純子
- 平和と戦争…………… 豊崎朝美
- 自分がどう変わるか楽しみ…………… 小幡順子
- アフガン難民帰還後のマラリア流行の実情…………… 中村哲/シャワリ・ワリザリフ

警視ホジャ(部分)*表紙絵 甲斐大策

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。現地の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

久々にすがすがしい気分です。

●ペシャワールからの手紙

JAMS 顧問医師・PLS 院長

中村 哲

お疲れさまです。

昨夜無事に松本さんとイスラマバードに到着し、今朝から働き始めました。

戻る途中、カラコルム上空で日が暮れました。外を見ると煌々と満月が東にかかり、明るく照らし出された大小の雪山の斜面が水晶の柱のように、一面の山岳を覆いつくしていました。それはそれは幻想的な光景で、松本さんも私も我を忘れ、しばらく食い入るように眺めていました。いつかどこかで見た懐かしい光景のようでもあり、初めて



患者さんのケアをするPLSのスタッフ
(うしろ姿の女性は倉松由子理学療法士)

遭遇するような不思議な世界でもあるようなのです。まるで夢の中をくぐり抜けるようにイスラマバード空港に降り立ちました。

シャワリ先生がいつものように空港で待っていました。わずか一カ月しか経っていないのに、一年ぶりのように感ぜられました。

新しいPLSは、期待以上です。ハンフリー氏をシャワリ先生がよく助け、病棟では主任格のサイード先生とらい診療員のヒダヤット君が、よく他のスタッフたちを率いてまとまりを作っていました。他の全てのスタッフたち、サンダル・ワイクシヨップの職人たち、生き生きと働いています。月並みですが「人は石垣」だと改めて思いました。良い現地の人材と協力に恵まれていることを感謝しました。チトラールのマストウジへのフィードバックも準備段階に入っています。外来の患者はうなぎ登りで、入院はわずか一床を残すのみで満杯です。明後日にはもう手術です。PLSがこの分野で新風を吹き込んだことが誰の目にも明らかかなようです。皆が皆、実のない宣伝や政治的なたちまわりに嫌気がさしている者ばかりなので、真つすぐに共通の建設的な目標でまとまっています。



JAMSのドクター・シャワリとドクター・ホセ

す。こんなことは珍しいです。雪ダルマ式に良心的な人々の大集団になって行くように思われます。久々にすがすがしい気持ちになりました。

(1995年3月19日)

摩訶不思議な混合チーム

お疲れさまです。

こちらも、かなり多忙になってまいりました。予想はしていましたが、こんなに展開が早まると思いませんでした。

PLSは一〇床が既に増設されて四〇床となり、それでも不足気味。これにて予定通り、PLSがペシャワールに集まる患者の事実上のらい治療センターとなるに至りました。私たちは自己宣伝しませんが、病棟は目一杯に稼働しております。

検査技師の松本さんが今回(いつものように静かに)大奮闘で、生き生きと検査室(名付けて「マ

アフガニスタン国内・主要活動地域



ツモト検査センター」を完備しておられます。
スタッフ三〇名、日本・アフガン・パキスタンの摩訶不思議な混合チームで、現地社会では奇跡的なまとまりと言えるでしょう。先日送ったスタッフ・リストの中で、小生の国籍を「JAP」にしております。ジャップとは聞こえが悪いですが、これは Japan・Afghan・Pakistan の三重国籍の意です。「治らい薬と同じく三者併用ですな。まるでこの十一年の恨みを晴らすように」とは、あるスタッフの弁。PLS 内部で対立の芽を徹底的に

粉碎し、少なくとも小生の前で国籍や宗教、地位や出身民族をとにかく言う者はいません。
こんなに多忙なのに誰ひとり愚痴をこぼす者なく、この新しい病棟をわが家のように慈しんでいるようです。働き中毒は日本人の専売でも、悪くありません。気持ちよく働くことは、なかなかよいものです。
なお、JAMSの方は一〇〇名のスタッフで変わらぬ活動が続け、PLSの充実に大きな助けとなっています。ヌーリスタン診療所では五月まで

に水力発電所が設置されます。冷蔵庫を搬入すれば全溪谷でワクチン接種が可能になります。一〇〇メートルの岩の水路はダイナマイト一〇〇本以上を使う難工事で、積雪の到来と共に一時中断していました。三日前に再開すべく、大量の物資を送り込みました。

一九九四年度のペシャワール会の二病院（JAMS1 PLS1）、四診療所（JAMS）の診療数は、十七万名を超える見通しです。

（一九九五年三月二十六日）
*この手紙は事務局宛に送られたものです。



わると共に一九八六年 JAMS（ジャパニアフガン・医療サービス）を設立、長期的展望に立つたアフガニスタン無医地区での診療モデルの創設をめざしている。現在 JAMS は一つの病院と四つの診療所を設置して、アフガン人の無料診療にあたっている。
なお、一九九四年十二月にはらいコントロールのための病院 PLS（ペシャワール・レプロシー・サービス）も設立、現在に至る。現地スタッフ約一三〇名、日本人スタッフ五名。
著書に『ペシャワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』（石風社）『アフガニスタンの診療所から』（筑摩書房）『ペシャワールからの報告』（河合文化研究所）がある。

一九四六年福岡市生まれ。西南学院中学・福岡高校・九州大学医学部卒。一九八四年パキスタンのペシャワールに赴任。計画を柱にしたアフガン難民の診療に携

みんなの秘められていた^{パワー}力がPLSで全開

PLS(ベシヤワールレプロシーサービズ看護婦 藤田千代子)

皆様お元気でしょうか。

PLSが発足してから三ヶ月が過ぎました。どんな状態にあっても時間だけは、平等にあるものだなあと、今少し落ち着いた気持ちで考えています。

開設後早速患者さん達が来院し、入院外来を受け入れ、診療が始まりました。来院する人は、PLSのうわさを聞いて自主的に来る人、各地域のクリニックのらい診療員が治療を依頼して来る人、公営HP(ホスピタル)のらい病棟から送られて来る人、ミッションHPのらい診療員が重症ケースや手術の必要な患者を送ってくる等で、予想通りのはこびとなっています。

■インシヤ・アッラー

時には、患者の家族や、他の施設に入院中の患者が二、三人でPLSの様子を見に来たりもしますが、私達は決して、PLSで治療をするようにとはすすめません。良い治療を受けられるようにするのが目的なので、日常あたりまえのように行っている、与薬、包帯交換、リハビリ等を、毎日静かに続けて、来院した患者は、何も特別な事で

はないその治療を受けられる。言葉よりも真実な行為です。後は、来る人は拒まずそして、インシヤ・アッラー(神のご意志のままに)です。一時は、ベットを置くスペースがなくなりどうやって患者を受け入れようかと、皆で頭をひねった時もありましたが、運良く(?)ラマダーンが近づき、傷の軽くなった人や、断食を自宅で守る人達が村へ帰って行きました。患者は、アフガン人、パキスタン人、約半々です。スタッフもアフガン人、パキスタン人、日本人の混合チームです。メデイカルワーカーは、皆、それぞれ新しい仕事を学びつつあります。中村先生の英語、パストウ語、ウルドゥ語(日本語はHPでは滅多に聞かれない)での講義も始まりました。らいについてや、マラリア、リーシユマニア、赤痢、貧血、腸チフス、フィールドワーク時の診察の仕方と、盛りだくさんです。ミッションHPで助手をしていたサダーカットが、熱型表の記録にとりくみました。体温、脈拍を記録するばかりでなく、誰がこの表を見ても、この患者がどんな治療を受けているかがわかるように、薬、検査の事なども記録したり確認したりするので、初めての人にはなかなかむづかしいようです。

表紙をめぐる小さな物語 6

甲斐大策

警視ホジヤ

警視ホジヤは、露店商達を愛してきた。白檀の小さな櫛で髭を整えながら警邏をしていても最近、髭の下を通るたび心が閉ざされてしまった気分である。

王の伝記や大盗賊の噂を唄い語る者達が住んでいたのは数世紀前、今は界限に「講釈師の家並み」の名を残すだけである。しかし、露店商がいた頃は、歌と物語が髭の下に溢れていた。

生薬、香油、強壯用トカゲ、毛生え薬、義眼、義肢、入歯、つけ髭、刺青具、呪術用骨片、……そして、人々の会話があつた。人々は抱擁を交わし合ってきた。正邪、真偽、全ては神とベシヤワールの名の下、等価値だった。

州政府が露店商達を「清掃」にかゝったこの二、三年、残照の中を揺れ動く人々の影は減ってしまった。

洋式の歯ブラシが髭を傷つけると信じる警視にとつて、アフガンの兄弟が商う歯磨き用の小枝は欠かせない。もう何年も警視は、ケツカルの小枝を売る幼い者達の露店をさり気なく守つてやり、一番の得意客でもある。

バシユトゥン文学の高揚を熱狂的に説くハジ・ダウド老人の書店には、最近、誰も近寄らない。老人もまた、兄弟をひっそりと応援する一人である。

警視は書店で茶を飲むつもりでやってきたが、老人は本を抱いた儘午睡していた。

記録するのにずいぶん時間はかかっていますが、根気良く続けています。

■じっくりやればいい

以前、ミッション病院に入院していた、アブドゥラがスタッフの一員となって加わり、彼は、今、包帯交換の仕事を身につけつつあります。清潔操作から始め、傷の消毒、洗浄……と進めていったのですが、ミッション病院でスタッフのする事を見ていたせいか、身につくのが早く、びっくりしました。傷の状態によって、どうして良いかわからなかったり、操作がむづかしかったりすると、少しも卑下することなく、「わからないんだけど」「むづかしいからやってくれ」と素直に言ってくる。この仕事を、いつまでに覚えなければならぬとか身につけなければならないという期限はないので、彼が出来るようになる迄じっくりやればいいと思っています。

サダーカットとアブドゥラは二人で、物品の管理もするようになりました。定期的に二人で調べているのですが、必ずと言っていい程大げんかをしていきます。原因は、数が合わないとかいうささいな事なのですが、物品については自分達の責任であること、又、責任を果たしたいという強い気持ちから、お互いに真剣なのです。

一度、ハサミが紛失した事がありました。私達は余分に物を持っていません。二人は、それは真剣に、病室、トイレ、くつ作業場とあらゆる所を、他のスタッフも混じえてさがしていました。ハサ

ミ一つにしても、物がなくなったという事実に変わりなく、責任の問題だけではなく、自分達は決して神の前において、盗みをする人間ではないという、大切な人間としての誇りがあるのでしょうか。

JAMSから来たドウラットは、薬品係として、レプロシテクニシャンのヘダーヤットは、外来・病棟・フィールドワークの責任者として、倉松さんは、エクササイズ、くつに関する責任者として今それぞれが自分の持場の役割をすすめています。

■見えない力が寄り集まって

私は、はじめ「このPLSは何もないところから始まった」と思っていました。でも、一緒に働く人達の、予想しなかった力というか、今迄見られなかった、その人の持っていたものが今、全開して発揮されているような感じがして、形のない見えないものが、寄り集まって始まっていたんだと、(ゆっくりとしたペースではありますが)一緒にやりながらや感動に近い気持ちにさせられています。病院として機能し始めているPLSをみると、あたりまえのようでもあり、奇跡的なことのようにも思えたりします。

シャワリ先生の心づかい、JAMSのスタッフの協力、現地のスタッフの力、日本の方々の地道な協力……たくさんの人々が関わり合って形となったのが、PLSです。

■チャイの飲み方をめぐって

ところで、アフガン人とパキスタン人と、日本人のスタッフが、昼食やお茶の時には少しもめたりします。例えばチャイ(お茶)について、アフガン人は、カワと言って、番茶のようなものに、砂糖を入れたり入れなかったりして飲みますが、パキスタン人はトールチャイと言って、紅茶にミルクと砂糖をたっぷり入れたものをのみます。それから、ピラフのようなごはんは、アフガン人はノーリンデという、とてもすっぱいみかんの汁をたっぷりかけて食べ、こうするとかぜをひかないと言いますが、パキスタン人は、呆れたように首を振りながら、それをたくさん摂るとのをやられて、かぜをひくと言います。

中にはあんなミルクティーは飲めないと行って、絶対に口にしないアフガン人スタッフがいたり、みかんについても、お互いに全く反対の言い分を言いあつてゆずりません。意地でゆずらないのではなく、本当にずっとそう思ってきた事なのです。時々意見を求められたりするととても困ってしまうのですが、ただ、おいしいからトールチャイもカワチャイも飲み、すすめられるままにみかん汁も少しだったり多かったりしている日本人の私は、彼らにどう映っているのだろうか、ふと思うことがあります。

PLSの靴ワークショップも仕事開始

PLS (ペシャワール・レプロシー・サービス) 理学療法士

倉松由子

九四年十一月にミッシオン病院から独立して新しく始まったPLS (ペシャワール・レプロシー・サービス) の靴ワークショップでは、私達と一緒にミッシオン病院から移ってきた三人の職人が働いています。親方はムルタザで、少年の頃から靴屋でたたき上げてきた腕のいい職人です。一般の靴屋で働いていたのをスカウトされて、らしい患者用の靴を作るようになって六、七年になる

そうです。次に長いのはグラム・ハイダーというて、元らしいの患者さんです。まじめでコツコツ働きます。一番若いのはフリードという若者で、靴の仕事を始めて二年弱になるでしょうか、彼は病院の運転手をしているハンジャンの息子でもあります。



靴ワークショップも倉松さんの仕事です(郵政省提供)

ミッシオン病院で働いていたときは、家族がパンジャブ州にいるムルタザや、ペシャワールの隣の町のチャルサダにいたときは、家族がバ

は、病院に寝泊りしていました。それで十月末にミッシオン病院を出て、まだ新しく活動拠点となる病院の建物が決まっていなかったときは、彼らの宿舎をどうするか問題でした。幸いに、ひき続いて我々と一緒に働くことを決断した看護助手のサダカットの家が近くにあり、その敷地内の男性客接待・宿泊専用家屋(地元ではウジュラといって、男の客を家の内部に入れず、女性からも隔離しておく目的で備えてある)を一時提供してもらえたので、そこから臨時活動拠点として間借りさせてもらってJAMSへ通勤することになりました。

型紙作りから開始

十一月六日、いよいよJAMSの一郭(病室の前のベランダ)で、PLS靴ワークショップの仕事開始です。製作のために必要な道具の多くはやむを得ずミッシオン病院に残してきたので、親方個人の道具と若干の木の靴型があるだけでした。親方は、皮革の靴のそれぞれの部分に切り出すときの型紙作りから始めました。私は前からの懸案だった患者専用の靴型を親方と一緒に試作してみることにしました。私たちが持っていた型は一般の靴屋で使っているもので、ファッショニ性を考えて前足部が比較的狭小でした。らしい患者の場合、末梢神経障害のため感覚や筋肉がマヒしていることがあり、仮に靴がきつくて靴ずれしていても気づかずにきずを作ってしまったたり、また圧迫によって変形をおこしたりします。足指が屈曲拘縮していて指の関節が上に突き出ているような患者はなおさらその危険性が高いので、一般の靴よりも前足部が幅にも高さにも余裕があるような靴が望ましいのです(そういう靴は健常者がいいても足に楽です)。

靴型は靴を作製するときの最も基本的な要素となるものなので、新しい病院に移って設備等が整い、ある程度の量産体制に入る前に、是非そのデザインや寸法をできるだけ足に障害を与えないようなものにいくらかでも改善しておきたいと思ったのです。

夏休みに日本に戻ったとき、大宮市で長年整形外科靴を専門に製作されてきた大塚さんにいろいろヒントを頂いてきたので、それをもとに今までの靴型



募集 長期ボランティア

「共に歩む」ワーカーを!!

JAMSとミッション・ホスピタルでは日本からのワーカーを募集しております。ただし、現地は熟練した医療技術者の腕の発揮できる日本の医療現場からは程遠いものです。これから、現地事情に合わせ、現地の「人づくり」を目指し、一緒に築き上げてゆこうとするものです。「高度の技術を教えてやる」のではなく、「共に歩む」ワーカーを歓迎します。

送り出す日本の社会は一般にゆとりがなく、短期の協力でも大きな困難があります。私共は現地でこれらの方々の便宜を図ることしかできませんが、以下の条件で受け入れます。

① 募集対象:

医療技術者(医師、看護婦(士)、検査技師、理学療法士など)。又は事務関係者で外国語(英語又は現地語)の堪能な者。

② ワーカーは、現地で1カ月、ペルシャ語またはバシュトゥ語又はウルドゥ語を習得、現地の人々と交わりを深めて仕事をさせていただきます。

③ 派遣団体などからのサポートのない場合、ペシャワール会派遣とし、1年以上の方は、現地の住居の便宜、及び現地生活費と日本からの往復交通費などを支給します。

④ 目的を持った見学であれば拒みません。但し、ゆきとどいたお世話をするゆとりがありませんので、依存せずに独力で来て下さい。(繁忙期には断ることもあります)詳しくは、ペシャワール会事務局に直接お問い合わせ下さい。

〒810 福岡市中央区大名1-10-25
上村第2ビル307号 ペシャワール会
電話 092-731-2372
092-725-3440(分室)

に皮革をはって幅や高さを足し、それで靴を二、三種類作って試用して最終モデルを作りました。外観が不恰好になってしまっているので親方の既成概念に反するし、またこっちは靴のしろうとのにわか勉強の物言いなので、半信半疑の仕上がりでした。

二人がかりで交渉

それをペシャワールにたった一軒あった靴型製作屋にもって行つて、今度はムルタザと二人がかりで靴型の職人さんにこちらの意図を説明しました。さらに値段の交渉に入ったムルタザが、「私の患者さんの治療奉仕のため奇特にも(ノ)日本からやってきて頑張つて(ノ)働いているんだ。患者にはただで(実は少々料金を頂いています)配っているんだよ。こういう特別有意義な(ノ)仕事のためだ。そっちも値段の方を勉強してくれ。」というのでこちらにも助けになるように、し

おらしい様子(無理か?)を装う努力をしました。こんなふうにして出来上がった靴型を正月に帰国した大塚さんにチェックして頂いて、足りない分の修正をお願いして、合格品にしてもらえたのでした。

次に靴の材料や小物類の買い出しです。ペシャワールのオールド・バザール(旧市街の中心地)の中のナマック・マンディ(塩市場の意)の辺には靴屋街があつて、そのすぐそばに、靴の材料である皮革屋、靴底になる古タイヤのスクラップ屋、縫製の糸、接着剤、止め金具、釘、はさみ等の雑貨屋、皮革切り出し用のナイフや手縫い用針専用の鍛冶屋などが集まっている一画があります。ミッション病院のときは古参のスタッフのバツティが靴ワークショップの責任者で、材料購入から製品の販売までやっていました。今度はじめて来た私は、一切ムルタザにまかせきりで買い物をしました。まとめ買いをするので店に入るとお茶が

出てきます。私はただ領収書の品目と金額と合計を確認するだけでした。

気持ちのいい子どもたち

それぞれの店では、店の大きさに応じて店主、番頭、手代、小僧さん格の人たちが働いています。特に小学校高学年位の子どもたちが、自分の背丈程もある商品を運んで来たり、客の買った物をきりきりと梱包したりしているのを見るのは気持ちのいいものでした。ちよつと手が空くとよその店の子と通りで遊んだりもします。おとなに対していっぱしの口調で値段を言ったりもします。多分この子たちは働きながら読み書きや計算を覚えるのでしょう。

鍛冶屋に行つたときには、男の子が一人で火の番をしていました。ムルタザが道具のとき直しを頼むと、「今父は出ていますが、すぐ戻りますので、

お客さんが先に他の店で買物を済ませた後でまた来て頂ければ、それまでに仕上げてさし上げられると思います。」と自分のできる仕事をしながらはきはき答えました(後でムルタザにウルドゥー語で大意を教えてもらった)。ああこの子は何の疑問もたずにお父さんと仕事をして、やがてその後を継いでゆくんだなあ、写真に撮って家に飾っておきたいなあ、と思いました。多分カメラをとり出したら、ポーズはとるわ、よそから子どもが集まってくるわで、ぶちこわしになるでしょう。こういうところで英語を話す人に会うと変に軽薄にみえてしまいます。また、女の外人の私がウロチョロしているのも場違いにみえるでしょうね。

ベシヤワールでミシン捜し

最後に残ったのが、業務用ミシンとグラインダーでした。どちらにもミッシェン病院においてきたのでまた新たに購入し直さなくてはなりません。グラインダーは機械屋に行けばどこでも売っていますが、皮革も縫えるようなミシンというところと扱っているのでしょうか。

以前使っていたのは、わざわざホールから買ってきたのだそうです。ムルタザもベシヤワールで売っている心あたりはないといいます。藤田さんがレディ・リーディング・ホスピタル(大きな州立病院で、看護婦学校が併設されているので、Lady Reading Hospitalという。患者さんたちはジェネラリー(General)大きな病院)といつて

いる)の整形外科靴製作担当の人なら知っているかもしれないというので、二人でききに行きました。その親方が、「ベシヤワールにシンガーミシンの代理店が数軒あり、自分たちが使っているのも十年位前にその中の一軒から購入した。近くのバザールにあるから、これから行ってみてあげよう。」と親切にいつてくれたので、連れていってもらうことにしました。

病院の広い敷地をずーっと横切って、さらに門を出てから店まで行く途中、年配のその人は息をはずませ足を引きずって歩いていましたが、やおら立ち止まって、「自分は心臓に病気があるんだ。」といいながら二トログリセリンの舌下錠(?)何かを口にほおり込みました。こっちがびっくり仰天して、「もつと早く言ってくればドライバーを呼んで車で行くようにしたのに、申し訳ない。少し休みましょうか。ここから先は力車で行きましょうか。」というのを、「大丈夫。もうすぐそこだよ。」と汗をかき歩き歩いて行きました。

念願の日本製ミシン

その店では品切れだったので、もう一つ別のバザールの店へ車で行くことにしました。相変わらずその人もつき合ってくれて、次の店で念願の日本製業務用電動ミシンをみつけることができました。性能はその親方がうけ合ってくれましたし、ミシンについていたラベルに出荷チェック時の担当者の田中という印が押してあるのを見て、なぜかこの機械なら絶対安心だという気がしました。値段

は五バーセント程値引きしてもらって二〇、七九〇ルピー、日本円で七万円弱でした。日本で買えば、もつとずっと高いそうです。

そんなこんなで、だいたいのものが幸運にもいろいろなたちの助力のおかげで揃ってきました。そして十一月十七日、私たちの新しい病院として借りることになった建物の大そうじを全員でやって、十九日に引越しました。十二月からは月間約百足の生産ノルマを達成しつつ現在に至っています。

前科一犯の私が……

今、問題なのは、靴の中敷に使っているビークライトという緩衝材を日本から手荷物として運んでいるので、それを絶やさないようにするのが大変なこと。それで現地でいい代替品を捜す必要があることです。もう一つの問題はムルタザ親方の休暇です。彼は週に一日ではなく、休みをまとめてとって、月に一回か二回家族のもとで過ごすようにしていますが、どうしても決められた日数より長くなっています。人情としてはわかるのですが、他の職人とのバランスや仕事量からいつて月に一週間以上休まれるのはまずいのです。「父の具合がよくなって」、「妻が病気で」、「子どもの病気がなかなか治らなくて」という彼に、以前「母が病気で看病しなければならぬから」といつて梓外の休暇をとって山登りに行ったことのある前科一犯の私が、渋い顔をしてみせなければならぬというわけです。

●ペシャワール会関東連絡会を結成

*

一歩踏み出す

ペシャワール会関東連絡会 佐藤純子

中村先生を迎えて、東京での五回目の報告会を三月十五日（水）に午後六時四十分から日本赤十字社の会議室で行いました。参加者総数は六十七人（会員四五人／非会員二二人）この報告会は関東連絡会発足以来、初めての催しです。

中村先生を東京に迎えての一回目の報告会は一九九二年の夏に開催されました。次いで一九九三年の八月にはシャワリ先生の来日講演も実現し、昨年は一月と七月の計二回行われました。この第一回めの報告会開催のためには、転勤で福岡から東京にいられた会員の辻さんが当初奔走され、二回目からはこれを引き継ぐかたちで横浜在住の服部夫妻が、お姉さんや姪ごさん・甥ごさんも動員して継続してこられました。

関東地方の会員数は約四〇〇人です。福岡

の事務局から、なんとか会員数を一〇〇〇人を目標に増やせないだろうか、との要請がたびたび寄せられ、昨年七月の報告会終了後、本格的にその発足が服部夫妻によって呼び掛けられました。

これにこたえて現在二〇人余りの東京都内と近郊の会員が協力を申し出ており、不定期の会合ながら、毎回打ち合わせには一〇人前後の出席があります。入会の動機は各々多様で年齢構成はほぼ各世代を網羅しており、職業も会社員、主婦、学生、教育関係者、団体各種機関勤務と多彩です。男性・女性の構成比率がいささかアンバランスなので男性の参加が期待されます。さらに報告会開催時にはその場で通訳や受付などの援助を申し出てくださるボランティアも毎回おられます。

活動の目的は定期的な報告会開催の準備と運営、関東地方の会員への会報郵送作業等に加えて、会員の拡充を図ることです。

今回の報告会の準備のために、二月中に二回、都内で夕方から集まり、累計で約四時間余り打ち合わせを行いました。外部の有意の人に開催を効果的に告知する手段（チラシ配布、新聞六紙・雑誌二誌のイベント案内欄へ

の投稿、ラジオなどの電波媒体及び複数関連団体への働き掛け）と担当者を決め、今後の会員拡充のために、会場での参加者へのアンケート実施が提案されました。参加費の金額設定、中村先生の著書の販売と簡単なサイン会の実施、新規会員の入会受付、講演後のお茶のサービス等、具体的な打ち合わせもたいへん速やかに行われました。過去四回の報告会の経験が生かされたものと思います。報告会までに新聞と雑誌各々一誌に開催告知が掲載され、チラシは一〇〇〇枚配布しました。とりわけ日本バキスタン協会からは、先方の会報郵送の際に当方の告知チラシも同封していただき会員各位に呼び掛けるという多大なご助力を頂戴しました。

ペシャワール会の発展のために一歩踏み出したばかりの関東連絡会です。関東地方のみならず全国の会員・関係者の皆様、よろしくご理解と今後のご教示をお願い致します。

乞う！ 関東地区協力者

現在、関東地区には四百人程の会員の方がいらっしやいます。中村先生の報告会の連絡や打ち合せなど、協力できる方はご連絡下さい。

【連絡先】服部さん

横浜市保土ヶ谷区境木本町55-21
電話 045 (716) 0117

平和と戦争

JAMS事務担当 豊崎朝美

動物（特に哺乳類）が好きで、大学でも畜産を専攻し、またサバンナの動物を見たくて初めての海外旅行（放浪？）でケニヤを選んだ、そんな私がベシヤワールへ来て、どうしても目に止まるのは街の中の動物達です。

例えば、タンガ（馬車）を引っ張っている色々な馬。毛艶もつやつやし、無駄な贅肉は全く無い均整のとれた体で、颯爽と走っている惚れ惚れするような良い馬がいるかと思えば、あばら骨が浮き出て、上り坂をあえぎ、あえぎ、やつと引っ張っている老馬、利かん気が強く、御者をてこずらせている馬と、なかなか一頭一頭個性があります。

ベシヤワールの動物たち

またロバも街の中でよくみかけます。工事現場の土とか野菜、果物等の重そうな荷物を背中に積まれ、大きな耳を時々動かしながら、いつもうつむき加減にトコトコと歩いている

姿は、柔順だけど、何か哀れを感じさせるものがあります。ある日、青草を山と背中に積まれたロバが三頭連なつて歩いている光景に出会いました。先頭のロバが積んでいる青草を後ろからついて来ている二頭目のロバがつまみ食いし、さらに三頭目のロバが二頭目のロバが積んでいる草をつまみ食いしながら歩いていたので、体に較べて、大きな頭と長い耳を持った、愛嬌のある姿のロバの、この光景は、まるでディズニーの漫画を見ているようで笑いを誘いました。

野良犬もよくあちこちにいます。この野良犬達は人間に愛想を振りまく事も無く、かと言って特別恐れている様子もありません。ごみ箱をあさっている時に、すぐ側を人が通っても威嚇する事もないし、また人の気配に脅えてこそそこそと逃げる事もあります。人間も野良犬に殆ど関心がないようで、子供達が石を投げながら追い回しているのは時々見かけるけど、野良犬が人通りの多い所で寝ていても、誰も気に止めません。人と野良犬はお互いに意識する事なく、それぞれの生活をしているようです。

他に、羊、ヤギ、水牛、時には駱駝が街の中を闊歩しています。猫は体が小さいためか、それほど目につきません。しかし好奇心が強

く、私達の宿舎にも恐る恐る入って来て、探索している姿を時々見かけます。どの動物にも共通している事は、車を殆ど恐れない事です。後ろから大型トラックに盛んにパーパーと煩しくクラクションを鳴らされても、馬は驚く事無く淡々と走っているし、野良犬は、交通量の多い道路の中央分離帯のすぐわきにある狭い安全地帯の所で平気で寝ているし、道路のすぐ脇で草を食べているヤギやロバは、車が一〇〇キロ以上のスピードで横を通り抜けても、知らん顔です。

自分の家はない

こんななんびりした事をつらつらと考えながら生活していると、いきなり現実の厳しさを目の前に突き付けられ、戸惑い、ショックを受けることがあります。こんな事がありました。日本に一時帰国する倉松さんをベシヤワール空港へ見送りに行った帰り、ドライバーのハンジャンに何げなく、倉松さん、家に帰ったね。ハンジャンはアフガニスタンの家に帰らないの？と別に深い意味もなく聞いてしまいました。すると彼は、アフガニスタンには自分の家は無いと言い、地面を指さし、家はこんな状態だと言いました。わたしの目の前にいきなり、戦場で荒廃した家並

みが広がり、アフガン難民である彼に、自分が何げなく投げかけた質問の残酷さに気づきました。それから彼は一言ぼそりと「あそこ（アフガニスタン）には平和は無いんだ。」と呟きました。私は言葉につまり「平和…平和はきつと来るよ。インシャラー（神の思し召しのままに）」と言うのが精一杯でした。アフガン戦争、そして現在でも続いているカブールを中心にした内乱の事はJAMSのスタッフからも聞き、本や新聞の報道でも目にしています。しかし、戦いの無いベシヤワールで平和な毎日を過ごしていると、私の意識の中から、現在でもベシヤワールから車でわずか数時間離れた場所では戦争が存在し殺戮を繰り返し、多くの避難民はキャンプ、あるいは路上で生活している現実が抜け落ちてしまふのです。戦争を、現実感を伴わない一つの物語りとしてしか受け止めれない自分がそこにいるのに気づかされ、何とも言えない苦い自己嫌悪を感じてしまいました。

つい日本の生活感覚が

ベシヤワールが平和と言っても、世界有数の治安の良い日本に較べれば、犯罪件数は多いです。言葉も殆ど解らないのにケニヤを旅行していた頃の、常に見知らぬ人を疑い、警

自分がどう変わるかが楽しみです

元久留米大学病院看護婦 小幡 順子

四月よりPLSのスタッフの一員として働くことになりました。

前回、秋に十日間程ベシヤワールを訪れた時に、新しいプロジェクトの話はうかがっていました。しかしこんなに早く実現し、まして自分が新たに開設された病院で働くことができるとは思ってもいませんでした。

十三年間働いた病院をやめ、ワーカーとしてベシヤワールに出向くことは、決意と勇気が必要でしたが、人間として、どこで行動する事が有意義であるのか、自分が納得するのか考えると、小さな事は気にせずに、やれる時に行動しようと思う様になりました。不安をいだきながらも、自分がどう変っていくかも楽しみです。

最初から多くの事を望まずに、少しずつ無理なく、持続的な努力を重ねていこうと思っています。

これから会報を通じ、PLSの活動と共に、日本をはなれて新たに感じた事など、伝えられたらと思っています。よろしくお願いします。

戒を怠らず気を許さない緊張感は、その後何度か一人で国外滞在の経験をする度に薄れ、ベシヤワールではJAMSの保護の下、比較的安全な生活に慣れ、つい治安の良い日本での生活感覚が頭をもたげてくる事も時々あります。一人で国外を旅行、あるいは滞在していた時は、自分の行動を規制するものではなく自由を楽しむ事はできる反面、寝る場所を探し、食べ物を確保し、自分の身を危険から守

る者は誰もなく、全てを自分自身で処理しなければいけなかった生活に較べると、ベシヤワール会からの派遣で、JAMSの保護を受け、その日の食事、住む場所を心配する事無く、さらにある程度の安全性が確保されているここベシヤワールでの生活は、生活習慣上そして安全性の面からも外出が思うように気軽にできないと言う不自由な部分はあるけど、なかなか快適です。

回アフガニスタン難民帰還後のマラリア流行の実情

'94年のフィールドワークの成果が顕著に現れる

JAMS(日本アフガン医療サービス)顧問医師 中村 哲 所長(医師) シヤワリ・ワリザリフ

(本稿は元来、国際保健医療学会で述べるのがふさわしいかも知れませんが、しかし、現地の実情をよく反映していますので、やや専門に立ち入りますが、まずは一般向けにかみ砕いて、会員のみなさんに紹介することにします。)

はじめに

マラリアは世界で最も犠牲者の多い疾患のひとつで、年間百万人以上が死亡していると言われる。太平洋戦争中、南方方面での日本軍人の「戦病死」の多くがこれによるもので、時には戦死者を上回ったことはよく知られている。

私たちは、アフガニスタン農村復興の立場から、JAMS(日本アフガン医療サービス)を中心に、アフガニスタン北東部山岳地帯三カ所に診療所をおき、住民の診療に当たっているが、マラリア、特に熱帯熱マラリアは現地では今なお致命的な疾患の一つである。一九九三年夏から秋にかけて爆発的な流行があり、その治療と地域でのコントロール活動に従事した。臨床的な立場から、この経験は教えられることが多かった。ここに紹介して、同様な仕事に従事する人々に多少役立つこ

とを願います。

調査方法・期間

①一九九二年四月から一九九四年十一月まで、アフガニスタン・ニングラハル州・ダラエ・ヌール溪谷(人口約七万)の診療所で、発熱を訴えて自発的に受診したもの、一三、四九八名中、確実に「マラリア症」と診断されたものを対象に、その発生の季節変動、原虫の種類を調べた。

②また、一九九三年十月から十一月、一九九四年十一月に行われたマラリアのフィールドワーク(八ヶ村・推定人口十万)で、発熱患者五、四一〇名中、臨床的にマラリアとして治療を受けた者について、発生頻度・年次推移を比較した。

ダラエ・ヌール診療所は同溪谷の中央にあり、遠くの村でも徒歩で一日以内で来れる。ただし、重症者の搬送は山道で困難なこともあり、受診する前に死亡する者がかなりあると思われ、対象はほとんどが歩行可能な軽症から中等度の患者と考えてよい。

なお、マラリア原虫陽性者でも、臨床症状を欠

く者は入れられていない。塗沫検査は、一患者につき一回のGiemsa染色(厚・薄混合標本)である。

結果

(1)一九九二年三月から一九九四年十一月までに発熱でダラエ・ヌール診療所で受診して、マラリアを疑われた者一三、六八八名の中、末梢血塗沫検査で確実に診断された者が四、九七〇名である。このうち、三日熱マラリア(以下PV)が三、八四〇名と圧倒的に多く、次いで熱帯熱マラリア(以下PF)が一、一三〇名であった。卵型マラリア、四日熱マラリアは見られなかった。(表1)

統計から以下が明らかである。

①発熱で受診した患者のうち、三六%以上がマラリアであった。ただし、季節毎に見れば、夏季・秋季で四〇～五〇%と高率になる。

②PVは毎年四～五月から増加し始め、八～九月を頂点に減少、冬季には極めて少ない。③PFは、これに対して八月下旬から増加し始め、一〇～十一月を頂点に急速に減少する。

④PVでは毎年・季節毎の変動が強いが、PFでは九・十・十一月に集中する傾向が一定している。(2)一九九三年にPFの大流行が見られた地区において、翌年ほぼ同時期のフィールドワークで、マラリア患者の著しい減少が確認された。(表2)

考察

アフガニスタン北東部の山岳地帯は、一般に乾燥地帯であるが、川沿いの盆地で稲作(水田)が

表1) ダラエ・ヌール診療所・マラリア症患者の末梢血塗抹検査

年・月	マラリア検査数	全陽性者	うち三日熱(PV)	熱帯熱(PF)
92年3月	104	4	4	0(0.0%)
4月	105	9	8	1(11.1)
5月	152	14	14	0(0.0)
6月	92	19	19	0(0.0)
7月	82	10	9	1(10.0)
8月	367	71	68	3(4.2)
9月	1033	422	375	47(11.1)
10月	898	390	295	95(24.4)
11月	752	327	207	120(36.7)
12月	314	96	67	29(30.2)
93年1月	331	11	10	1(5.2)
2月	157	8	8	0(0.0)
3月	105	25	24	1(4.0)
4月	134	45	43	2(4.4)
5月	247	66	64	2(3.0)
6月	311	114	114	0(0.0)
7月	255	83	83	0(0.0)
8月	559	364	273	91(25.0)
9月	913	515	359	156(30.3)
10月	912	500	199	301(50.3)
11月	425	271	118	153(56.4)
12月	406	67	32	35(52.2)
94年1月	333	24	13	11(45.8)
2月	217	25	24	1(4.0)
3月	636	114	109	5(4.4)
4月	716	309	307	2(0.6)
5月	540	241	237	4(1.7)
6月	673	209	207	2(1.0)
7月	698	221	221	0(0.0)
8月	633	189	173	16(8.5)
9月*	—	—	—	—
10月	381	126	85	41(32.5)
11月	207	81	71	10(12.3)
総計	13,688	4,970	3,840(77.3)	1,130(22.7)

(*事故によって診療所を一時閉鎖(8月31日より10月10日まで))

表2) フィールドワーク年度比較(ダラエヌール対岸地区のみ)

期間	全有熱患者	マラリア症疑い	塗抹検査数	三日熱(PV)	熱帯熱(PF)
93年10-11月	2,056	1,319	580	34	105
94年11-12月	3,354	805	75	1	1



ダラエ・ヌールの対岸地区でマラリアのフィールドワークをするJAMSスタッフ（1994年秋）



1993年全国から寄せられた支援をもとに行われたフィールドワーク以降マラリアの発症は激減した

行われ、緯度は西日本に相当し、四季が明瞭である。マラリアの媒介昆虫である *anopheles* 属（ハマダラカ）の蚊の繁殖は、水田の開始される四月から激増する。マラリア総患者の増加時期は、完全にこれに一致する。

ダラエ・ヌール渓谷では、難民の爆発的帰還が一九九二年五月から始まり、翌年四月までには、難民化していた三万人のほとんどが戻っている。同地はそれまで一三年にわたる内戦で荒廃しており、水路の破壊でほとんど半沙漠状態であった。帰還した住民は、その年のうちから水田を復活させ、稲作を開始、荒廃地の七割以上が復旧している。皮肉にも、マラリアの大流行はこのことと関係があるものと思われる。

注目したいのは、PFである。その理由は、

(a) 死亡率が他のマラリアに対してはるかに高い。
 (b) 臨床症状が典型的でなく、塗抹検査で原虫が見つかりにくいので、しばしば誤診されやすい。
 (c) 安価かつ効果的であったクロロキンに対する抵抗が見られることなどで、いったん大流行を起こせば共同体に大打撃を与える。アフガニスタンにおける帰還難民の居住環境は今なお甚だ劣悪で、ほとんど独力で復興しているところに、このような大流行があると致命的な損失となる。我々が昨年からの動向に注意し、しばしば治療チームをフィールドに派遣しているのはこのためである。
 興味のあるのは、PFがまるでPFVと入れ替わるように遅れて出現、むしろ水田の終わる秋から初冬にかけて大流行を見ることがある。ダラエ・ヌール診療所で診る患者は地域全体の一部に過ぎ

ないが、統計がこの事実をよく反映している(表1)。また、PFの場合、三四回以上血液塗抹検査をくりかえさねば発見できないことが多いので、実際の発生率はもっと高いに違いない。

この遅れは奇妙である。普通、各マラリアの中で潜伏期間が最も短いのがPFで、一カ月を越えないと記載されていることが多い。原因は不明だが、PFだけを媒介する蚊が後で発生するとは考えにくい。PF・PVとも同時に感染し、何らかの理由でPFによる症状だけが遅れて出てくると考える方が自然である。以下の理由が推測される。

①クロロキン中等度耐性。又は、クロロキンの不適切な服用。耐性がないPVだけ治療し、耐性があるPFはある程度速さを落とすだけで、徐々に増殖を続ける。感染から発症までの潜伏期間が長くなる。

②PVでは潜伏期間が六カ月以上のことが珍しくなく、前年秋に感染したPVが翌春出現する。

③蚊の増加と患者数との相乗が流行の程度を規定するなら、比較的数の少ないPFは、PVよりやや遅れて出現する。

しかし、いずれも推測であって、事実はずっと複雑なのかも知れない。ただ、クロロキン耐性のPFが主流であることは確かで、グラエ・ヌール診療所では一九九二年からクロロキン治療による「再発例」が珍しくなかった。一九九三年秋から、耐性の殆どないと言われるキニーネを使用し始めて、明らかに再発が減った。

フィールドワークでもクロロキンを使用せず、

昨年から全てキニーネに変えているが、訪問地区では著しい効果を上げた。個々の再発を減らすのみならず、翌年の流行時期に塗抹検査でPF陽性率が著減している(表2)。クロロキンと他の抗マラリア剤との併用も試みられている。しかし、翌年の流行の程度などを見ると、複雑で服用しにくい処方方の調査をくりかえすよりも、キニーネを使う方が効果的だったようである。



いったい農業を営む限り、マラリアの予防は不可能である。「安定相」という概念が示すように、自然免疫が最も信頼するに足る。マラリア撲滅の過去の教訓は、人間と自然との共存であった。媒介昆虫の「撲滅」は、よほど人工的な環境を作らねば達成できない。また、完全な「コントロール」が達成された地域は、自然免疫の消失によって、後の再流行時におびただしい犠牲者を出す「不安定相」に転じた。

「病原体との共存」と述べるのは、いささか語弊がある。しかし、公衆衛生学においても、我々は「科学的な論理」という名の下に、オール・オア・ナッシングの強迫的な完全性に捕らわれてきたと言えないだろうか。我々の結論はもっと単純である。犠牲者を減らすのは、強迫的な「根絶モデル」よりも、発病時に治療できる診療施設があること、継続的かつタイミングのよい治療フィールドワークである。人間は自然の一部であるという事実から逃れることができない。感染は適当に起きて、自然免疫を維持していた方がよい。現地では九月、流行の始まると想定される頃、と

くに人口の移動(難民帰還など)の直後、クロロキン耐性を想定した薬剤で行うほうが効果が大きいと思われる。

なお現地で、殆どの農村住民が、町に下るバス賃はおろか、二二〇円前後のキニーネを買うほどの現金収入さえないことを、最後に付言しておきたい。

まとめ

アフガニスタン北東山岳地帯・グラエ・ヌール溪谷およびその近辺の盆地で、一九九二年三月より一九九四年一月まで、JAMS(日本アフガン医療サービス)の診療所にて治療を受けた一三、六八八名の熱性患者、およびフィールドワークで治療した五、四一〇名の発熱患者のうち、マラリア症と診断された例を集め、現地のマラリアの実情をのべ、帰還後もないアフガニスタン難民の生活状態の一端に触れた。特に、熱帯熱マラリアの動向について調べ、現地に即した有効な対処を検討した。

未使用の切手・ハガキを！

*会報の発送費に、年間百万円以上がかかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。
(古切手は扱っておりません)

●事務局だより

*PLSは、予想以上のテンポで軌道に乗りつつあるようです。喜ばしいことですが、私たちの補給がそれに間に合うよう努力する必要があります。よろしく御支援下さい。

*関西大震災は、その被害の大きさとそれに対する対応で、私たちがすむハイテクの高度消費社会も、一皮むけば「徒然草」や「方丈記」の世界と本質的に変わらないことを露呈しました。同時に私たちの心の底に眠っていた他者への思いやりの真情も呼び覚ました。バーチャル・リアリズム(仮想現実)が社会の隅々まで浸透しつつある時代に、むきだしで圧倒的な現実によって、なにかを覚醒させられたと思います。亡くなられた方々のご冥福を祈ると共に、被災された方々には、日常的に困難な日々がつづくと思いますが、一日も早い立ち直りを願ってやみません。最後に被災された会員の方からのお便りを紹介します。

「いのちが助かったことだけでも感謝し、物が無くなつたことで、すっきり、さっぱりしました。」(宝塚市N・K)「この地震で、物欲がすっかりなくなりました。」(長田区N・A)「世界には、こんなつ

らい生活を強いられている人が多数いることが、よくわかったような気がします。」(垂水区K・T)

*関西大震災以後の一連の事件を見ると、社会構造の深部で大変動が起こっているようです。その論評を聞くかぎり、学者も芸能リポーターも大差なく、先入観が無効の時代に、突入しつつあるようです。

【◎村から】

私の職場の女性の平均年齢は三十五歳。◎の場合も定かではありませんが、ほぼこのあたりとにらんでいます。でその違いはというと、◎の女性の底知れぬパワーにあります。あふれる知性(？)と教養(？)に加え、いつまでもみずみずしいそのイキのよさは、天下一品といったところでしょうか。そんななかで仕事らしい仕事もせず、ただのんびりと眺めては感心したり、たまげたりしているだけの私ですが、これがまた体になじむというか居心地がいいというか◎色に染まりはやく六回目の春です。こんな私もいます。◎の戸を叩いてみてください。未成年の方、二十代の男性の皆さんも怖がらないで、どうぞ。さあ！

(巨)

ドラエ・ヌールへの道

—アフガン難民とともに—

中村哲 四六判上製三二六頁 定価二〇六〇円
ひとりの日本人医師が、現地の軌轢 日本人ボランティアの挫折、自らの内面の検証等、血の噴き出す苦闘を通して、ニッポンとは何か、「国際化」とは何か、を根底的に問い直す渾身のメッセー

石風社

福岡市中央区大名一丁目一十五
電話 〇九二(七一四)四八三八

ペシャワールにて [増補版]

中村哲 四六判上製二六〇頁 定価一八五四円

石風社

福岡市中央区大名一丁目一十五
電話 〇九二(七一四)四八三八

アフガニスタンの診療所から

中村哲 B6判並製二〇〇頁 定価二一〇〇円

筑摩書房

東京都台東区蔵前二丁目一六四
電話 〇三(五六八七)二二六七〇

会 則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のバキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。

④会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一口一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。

⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。

役員の改選は毎年総会にて行う。

⑧毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。

⑨本会の事務局をFARA HOUSE
(〒八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇、二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三二二一三七二) 内におく。